

【書評】近藤ブラウン 妃美, 坂本 光代, 西川 朋美 (編集)

『親と子をつなぐ継承語教育 ―日本・外国にルーツを持つ子ども』

くろしお出版, 2019

谷口ジョイ*

静岡理工科大学 情報学部

「継承語」とは、家族の構成員（あるいはその一部）が、自らが居住している国や地域で使用されている主要言語以外の言語に、帰属意識を有する言語を意味する。本書は、日本の国内外における継承語教育を、主に個人的・社会的な側面から論じたものである。居住地を問わず、親の母語を子どもが継承するという行為にはどのような意味があるのか、また継承語の指導や学習はどのように行われているのか、継承語の保持や伸長にはどのような要因が影響しているのか、といった問題について複数の著者が幅広く考察を行っており、継承語教育に取り組む家庭や教育機関、またコミュニティにおける現状と課題について、概説的に述べた書物である。

序章（近藤ブラウン妃美著）では、海外や日本国内における継承語教育を俯瞰し、「継承語」の定義を複数、紹介している。「継承語」という概念は決して新しいものではないが、今日の教育政策を鑑みると、旧来の「親から受け継ぐ言語」と言った定義には収まらないということを個別の事例を引きながら説明している。

本書は4部構成となっている。第1部は、バイリンガリズムの発達理論に基づき継承語教育について議論している。第2部では、海外の継承日本語学習者に焦点を当て、継承語の保持や伸長に影響を与える要因として、モチベーションやアイデンティティについて述べている。第3部は、海外の学習者に対する指導や学習を実践分野から概説したものである。第4部は、日本に居住し、なおかつ海外につながる子どもの継承語教育について、その特長を懇切に解説している。

本書は、さらに18の章に分かれているが、紙幅も限られていることから、ここでは第1部を中心に紹介したい。まず第1章（坂本光代著）では、「バイリンガル」とはどのような人を指すのか、その定義から論じている。さらに、言語の習得時期や言語能力といった観点からバイリンガルの分類が明瞭になされ、母語と第二言語（以下L2）

1 個人的側面としては、ルーツとなる言語の習得により、家族あるいは所属コミュニティとのつながりが強まり、自身の家族関係にも影響が及ぶことがある。また社会的側面を考えると、貿易や安全保障面での活用が期待され、教育政策にも関わる重要な問題となっている。

*Email: taniguchi.joy@sist.ac.jp

の関係に関する仮説が簡潔に説明されている。また、比較的新しい概念である *translanguaging* (Garcia and Li, 2014) についても解説が加えられている。*Translanguaging* は、複数言語使用者が、L1 と L2 と異なる独自の言語システムを構築しており、自身の言語レパートリーの中から場面に応じた語彙や表現を戦略的・創造的に使用しているという考え方である。さらに1章では、語彙やメタ言語意識という点から、バイリンガルとモノリンガルを比較しており、継承語教育を取り巻く諸問題を理解する上で、重要な観点が紹介されている。

保護者や教育者が継承語教育に取り組む際に、具体的な学習・指導方法の習得に力を注ぐ傾向があるが、1章で述べられているような理論的枠組みの知識がないと、その道筋を見誤ってしまうことがある。そのような意味でも、本書の1章は重要な役割を果たすであろう。

続く第2章（田浦秀幸著）では、継承語習得を認知能力の発達という側面から検討している。田浦は章の冒頭で、「複数言語環境にある児童は、母語が確立されず、言語能力ばかりか、知能にまで遅滞が生じる」という言説を批判的に取り上げ、このような考えが導き出されたのは、20世紀前半に行われた研究の手法に瑕疵があったためだ、と指摘する。「バイリンガルはモノリンガルに比べて、言語の発達が遅れるのでしょうか」「知能が劣ると聞きましたが、本当ですか」という質問は、評者自身、複数言語を使用する子どもの保護者から何度も受けてきたものであり、この言説に対する適切な答えを持たない人が多いのではないかと推察される。この問題について著者は、バイリンガルの認知能力についての知識が波及していない現状を述べた上で、心理言語学及び脳科学の領域における複数の先行研究を紹介し、バイリンガルの認知的有意さを丁寧に説明している。中でも興味深いのは Taura (2019) の「バイリンガルの言語能力と脳の賦活様態は一旦生み出されると一生涯安定して保持できる静的なものでなく、日々変化する社会・教育・職場言語が変化した場合、日々接する言語が次第に優勢となる『動的』なものである」(p.33) との一節である。複数の言語に接触しながら育つ子どもたちは、それぞれが与えられた環境の中で、自分に必要な言語能力を取捨選択し、主体的に言語活動に携わっており、その能力は「動的」であることを理解する必要がある。より長期的な展望をもって継承語教育に携わる必要性を再認識させてくれる章であろう。

第3章（坂本光代著）は、継承語話者が社会や家庭、あるいはコミュニティの中で複数の言語をどのように使用・選択しているのかについて社会言語学的な見地から論じている。本章ではまず、個別のものとして研究されてきた、人間の高次認知機能が、実際は社会との関わりの中で発達するという Vygotsky の理論を紹介し、複数言語環境にある子どもにとっても、他者との関わりがいかに重要であるかを説いている。ここで挙げられている「発達の最近接領域 (ZPD)」「足場作り (scaffolding)」「活動モデル」は、継承語学習者への指導にも大いに活かせる重要な概念であろう。また章の後半で言及されている「場面別の言語習得」は、言語習得のあり方を方向づける決定的な要件とも言える。継承語を使用する子どもたちは、さまざまな場면을体験するこ

とで複合的な言語能力を身につけており、これを意識した教育実践が望まれる。これまで、複数言語環境にある子どもの言語に焦点をあてた先行研究においては、年齢や海外滞在期間といった数値化しやすい要因が主に扱われ、子どもたちを取り巻く社会環境については精査されることが少なかった。そのような意味でも本章は非常に意義深く、この点を意識した教育実践が望まれる。

第1部の最終章（折山香弥著）は「日本語を優勢言語としない子どもたちのバイリテラシーの習得・発達」を扱っている。本章では、なぜ継承語によりリテラシー能力を育成することが肝要であり、またそのためにはどのような社会的支援が求められているのかという点について解説を加えている。著者は、子どもの継承語リテラシーの発達が社会文化的要因に大きく左右されることを指摘し、子どもたちが育つ社会において、継承語がどのような価値をもつのかが大きく影響すると述べている。また継承語リテラシーの発達には、教育機関やコミュニティにおける支援が不可欠であると結論づけている。継承語を学ぶ子どものバイリテラシー能力についてはこれまでほとんど研究の対象となっていなかったが、子どもたちは、知識の獲得や新たな概念の形成、情報の共有や問題解決などを継承語で行っていることがあり、この点は重要な研究課題の一つと言えよう。

他にも、米国における学齢期の継承日本語学習者がどのような言語教育支援を受けられるかを解説した第2部5章（バトラー後藤裕子著）や、幼児や低学年の児童を対象とした継承日本語教室で用いられる教材について紹介している第3部9章（山本絵美著）など、本書が扱うテーマは多岐に渡る。第4部15章（櫻井千穂著）では、日本語を母語としない児童生徒の言語能力を評価者との対話を通して測るツールであるDLA（Dialogic Language Assessment）²の有用性について述べており、日本国内の外国人児童生徒の日本語教育に携わる者にとって有用である。

以上、第1部を中心に書評を述べてきた。従来の研究においては、複数言語を併用する児童の言語能力をモノリンガル児童と比較した上で、その差異に焦点を当てた分析がなされてきた。また、二言語の混在、交差使用を否定的に捉える傾向があった。これには「バイリンガルとは、モノリンガルの言語能力を両言語において兼ね備えている者」という観点から研究がおこなわれてきたという背景がある。本書では、こうした枠組みを取り払い、子どもたちが社会や学校教育において使用されない継承語を社会・文化との関わりの中でどのように伸長させていくかをさまざまな角度から述べている。

本書は、継承語教育の意味世界を多様な視座から説明しており、指南書としての側面も持ち合わせている。本書にはさらなる学びを促すために「もっと詳しく調査・研究したい人のために」というセクションが設けられており、教科書としての利便性も

² DLAの目的は、子どもの言語能力を「点数化、序列化して示すことではなく」（p.239）評価者の支援を通して、何ができるのかを把握し、またどのような学習支援が必要とされているのかを多角的な視座をもって捉えることを目的としている。

備えている。関連する最新の研究動向も豊富に紹介されており、今後の継承語教育の質を高めるためにも大いに参考になるものである。

近年、継承語教育を取り巻く環境は多様化・複雑化しており、複数言語環境にある子どもたちに対する継承語教育もまた転換期にきている。依然、多くの国や地域において、児童の継承語教育に対する行政支援は乏しく、継承語の育成は各家庭の努力に大きく委ねられているというのが現状である。評者自身は、海外に居住する「日本につながる子ども」の継承日本語教育を小規模な自助グループがどのように実践しているかという観点から、これを専門的に検討しているが、こうした自助グループは通常、保護者が主体となっており、その規模や流動性から全体像の把握が困難である。また、最も支援が行き届かない集団であると言える。

本書は、日本社会の中で見えにくい存在となっている「日本・外国にルーツを持つ子ども」に光を当て、どのような働きかけが有効であるのかを多くの人が考えるきっかけになると確信する。

【参考文献】

García, O., & Li, W. (2004). *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. London, UK: Palgrave Macmillan Pivot.